

## どうする！？ 穿刺液検査から踏み出す次への一歩

◎前田 佳成<sup>1)</sup>  
小牧市民病院<sup>1)</sup>

## 【はじめに】

「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部改正する法律」において現行制度では、穿刺液検査に関連した特定行為となるタスク・シフト/シェアの業務は含まれていない。しかし、検査技師が有する専門的な知識を活用し、診療の補助行為を行うことは穿刺液検査のみならず様々な分野の検査業務で適用できると考える。その中で穿刺液検査を実施する検査技師がどのように現状の業務範囲から踏み出し、診療補助に参画し、より効率的に良い医療が提供できるようにするにはどうしたらよいか考えたい。

## 【穿刺液検査から見たタスク・シフト/シェア】

穿刺液検査では侵襲性を伴う検体採取を行っているが、この医療行為や補助行為は検査技師には認められていない。そのため、穿刺液検査でタスク・シフト/シェアへ参画できる場合は検査後のプロセスにあると考える。そこで考えられるのが「検査依頼の代行入力」である。穿刺液検査から得られた結果で次のステップを考えた際に医師が検査依頼を追加して、検査室に連絡する必要がある。この作業を代行することで、医師の負担を軽減させることができる。これまでは異常所見に対して電話連絡や検査システムのコメント機能などを利用して臨床に報告して終わっていたが、次のステップに繋げるための検査依頼を検査技師の判断で行うことで現状の業務範囲から抜け出し、タスク・シフト/シェアに参加できると考える。また、検査所見の報告書を作成するなど、検査を追加した理由を明確に記載することで医師が検査結果を評価しやすく、検査技師が対応した内容の把握しやすくなるため医師の業務負担を軽減させ、効率的な医療の提供に貢献できると考える。

## 【タスク・シフト/シェアに参加するための一歩】

検査技師の判断で検査の追加を代行入力するためには「プロトコール」が必要である。「プロトコール」とは、事前に予測可能な範囲で対応の手順をまとめたものを指す。つまりは、穿刺液検査の結果から得られた情報に対して、医師が次に追加する検査について事前に医師と協議した上で取り決めておくことである。検査追加の代行入力は検査技師が個人の判断で追加するものではなく、あくまでも医師の指示のもとで実施する診療の補助行為である。そのため、あらかじめ考え得る結果のフローを作成し、医師から承認を得た項目について行うようにしなければならない。まずは医師と「プロトコール」を作成することが代行入力をするために検査技師が取り組むべきははじめの一歩だと考える。

## 【まとめ】

穿刺液検査においても検査依頼の代行入力や検査所見の報告書を作成するなど、診療の補助行為を行うことでタスク・シフト/シェアに参加することが可能であると考えられる。そこには検査技師だけの知見ではなく、医師や関連する医療スタッフとの意見交換が必要である。検査技師としてなにごとができるのかを伝えるためにはより精通した知識を備えていく必要がある。タスク・シフト/シェアへの参画には、まずは自身が向き合っている検査業務をより確立したものとし、専門的な知識をもって対応できるようにすることが重要である。穿刺液検査に携わる検査技師がタスク・シフト/シェアに向き合うことで検査技師の活躍できるフィールドが広がることを期待する。